

戯曲『サロメ』

あらすじ

ユダヤの王・ヘロデにとらわれていた預言者ヨハネに恋をしたサロメは、宴の席で踊りを披露する。たいそう喜んで「何でも欲しいものをやろう」と言ったヘロデに対し、サロメは銀の盆に載せたヨハネの首を求めた。銀の盆に載せられたヨハネの首にサロメは大喜びで口づけし、それを見て恐れを抱いたヘロデは兵士にサロメを殺すよう命じた。

仏語版で発表されたワイルドの戯曲は、翌 1894 年、英語版に翻訳され、ピアズリーの挿絵入りで刊行された。性的な暗示や物語と無関係なシーン、ワイルドのカリカチュアなどを含み、挑発的ともとれる内容であった。



《月の中の女》

劇の冒頭で月をながめながら若いシリア人が「いかにも美しい、今宵の女王サロメは！」と言う一節に関連している。月の顔はオスカー・ワイルドのもの。



《タイトルページのためのデザイン》

角を持つ彫刻が施された石柱は両性具有で、乳首とへそは目になっている。ヘルメスや庭の神プリアポスとして古代ギリシャの神々を模したのかも知れない。石柱と跪く有翼の人物の性器は検閲され、修正された。

『サロメ』の挿絵は、会期中展示替えを行います。

△:前期(11月19日~12月26日)のみ展示

△▲:全期展示

▲:後期(2023年1月4日~1月29日)のみ展示



《表紙のためのデザイン》

孔雀のはねをモチーフにしたデザイン。英語版『サロメ』では使われず、後に『丘の麓で』の表紙として使用された。



《挿画リストのためのデザイン》

曲線を用いた装飾と、有翼で半人半獣の人物などのグロテスクなモチーフがみられる。



《孔雀のスカート》

ピアズリーの最も有名で評価の高いデザインの一つで、劇中の2つのシーンを融合したもの。1つは、ヘロディアスの侍従が若いシリア人に、サロメを見すぎないように警告している。もう1つ、ヘロデがサロメの踊りと引き換えに50羽の白い孔雀を約束したシーンも想像させる。



《黒いケープ》

掲載不可となった《ヨハネとサロメ》の代わりに描かれた挿絵。サロメは1890年代のドレスを身に付けている。「きれいなだけで、内容とは何の関係もない」とピアズリーはうそぶいた。



《プラトニックな悲嘆》

若いシリア人の死を悼むシーンとされる。サロメを慕うシリア人は、サロメへの届かぬ恋に絶望し、死を選ぶ。またこの絵は、同性愛の隠喩とされることもある。余白と抽象的な形を大胆に使っており、右上の雲からのぞく月は、ワイルドの似顔絵。



《ヨハネとサロメ》

向かい合うヨカナン(左)とサロメ(右)。陰と陽のような鏡像としての両者を、強い緊張感で表現した。部分的ながらサロメのヌードと、ヨハネの両性具有的な外観のために、この挿絵は掲載されなかった。



《ヘロディアス登場》

右に立つ従者の局部が巨大なイチジクの葉で隠されているが、これは出版前に手直しを要求されて描き加えられたもの。本挿絵には検閲を潜り抜けた直接的な性的描写が複数箇所にも隠されている。また、画面手前の道化師の顔はワイルドである。



《ヘロデの眼》

舞台上に登場したサロメの、ヘロデ王の宴席で踊りを踊る前のせりふ。「なぜ王はあかしを見てばかりいるのだろう。…妙なこと、母上の夫ともあろうに、あんな目であかしを見るなんて。」ヘロデの顔はワイルドを模している。



《腰のダンス(ヘロデの前で挑発的に踊るサロメ)》

ワイルドは戯曲の中で、サロメの踊りを「7つのヴェールの踊り」と記していますが、どのような踊りなのか詳しい説明はありません。ピアズリーのサロメは、異形のミュージシャンが生み出す音楽に合わせてダンスを披露している。



《サロメの化粧II》

性的に露骨すぎるとして没となった3つの挿絵のうちの1つ。様々な箇所にも性的な暗示がちりばめられている。ビクトリア朝の読者にとって、曲がった背骨は「不道徳」を示した。



《サロメの化粧II》

性的に露骨すぎるという理由で掲載不可となった《サロメの化粧II》の代わりに描かれた挿絵。サロメは現代的な服を着て化粧機の前座っている。本棚に並んでいる『ナナ』『マノン・レスコー』などの本は、当時スキャンダルを巻き起こした書物である。



《ダンサーへの報酬》

踊りの褒美を手にしたサロメ。彼女はヨカナンの切断されて血の滴る頭を彼女の方に傾けて眺める。お互いの顔を映し出すかのように、彼らは同じ表情をしています。頭が載っている大皿を支えている、死刑執行人の細長い腕にも注目。



《クライマックス》

流れるような曲線はアールヌーヴォー様式への近接を示す。《お前の口に口づけするよ、ヨカナン》よりも線が単純化され、サロメがヨカナンの唇にキスをする瞬間をより引き立てている。優雅なりボンのように血が流れ落ち、池から立ち上がるユリはヨカナンの純潔を象徴する。



《長椅子に座るサロメ》

ピアズリーが差替えを行った挿絵は全部で3点あるが、3点目がどの挿絵なのかは資料がないため定かではない。主題も、これが『サロメ』のために描かれたものなのかははっきりしていないことから、この《長椅子に座るサロメ》が該当作品名なのではないかと推察されている。



《終章》

しばしば「章末飾り」と呼称される。サロメは裸で、ピエロの人形と牧神によってパウダーケースに埋葬されようとしている。『名言集』におけるグロテスクのムードに近い。